
一般演題（口演発表） | 一般演題（口演発表） | [一般口演1] 口腔機能

一般口演1

口腔機能

座長：

山田 太郎（駒込大学歯学部高齢者歯科学講座）

鈴木 一郎（豊島区立大学歯学部高齢者歯科学講座）

2023年6月17日(土) 12:45 ~ 13:25 第3会場 (3階 G304)

[O1-1]周術期がん患者における術後の舌圧低下と経口摂取回復との関連性

○山田 一子¹、佐藤 二男¹、高橋 三太¹、鈴木 寿子¹ (1. 豊島大学 歯学部 歯科・口腔外科学講座)

【目的】

がん周術期では、手術侵襲や栄養不良により低栄養や筋力低下をきたす。本研究では、周術期がん患者において術後の舌圧低下と経口摂取回復との間に関連があるか検討した。

【方法】

対象は、2015年9月から1年間に当院歯科外来を受診し、舌圧の計測が可能であった消化器がん患者124名（男性75名、平均年齢67.5±11歳）とした。手術前日と術4日後に舌圧を計測し、その変化率を舌圧変化率と定義した。また、術後の経口摂取開始日、最終の食形態まで到達した日、退院日、を電子カルテから抽出し、手術日からそれぞれの日にちまでの日数を計算した。対象者をがんの原発部位によって胃、大腸、肝臓の3群に分け、経口摂取開始まで、最終食形態到達まで、退院までのそれぞれの日数を従属変数、舌圧変化率と原発部位を独立変数として、重回帰分析を用いて検討した。

【結果と考察】

舌圧低下率は、術後の経口摂取開始までの日数とは有意な相関を示さなかったが($\beta=0.063$, $p=0.51$)、最終食形態まで到達した日数とは弱い相関関係を示した($\beta=0.301$, $p=0.001$)。一方、術後の退院までの日数も舌圧変化率と有意な相関関係はなかった($\beta=0.061$, $p=0.53$)。また、それぞれの日数は、原発部位による有意差も認めなかった。術後の経口摂取開始日はクリニカルパスで決定されていることが多いため、舌圧変化との有意な関係を示さなかった。しかし、本結果より、周術期の舌圧低下が、その後の経口摂取回復に影響を及ぼす可能性が示唆された。一方、退院までの日数も術後の合併症や全身状態に強く影響されるため、舌圧変化とは有意な関係を示さなかったと考えられた。本研究より、周術期の舌筋力低下を予防することで、早期の経口摂取回復に寄与する可能性が示された。

（COI開示：老年株式会社、その他2社）または（COI開示：なし）

（〇〇大学 倫理審査委員会承認番号 9999-22）または（〇〇大学歯学研究科倫理審査委員会より付議不要の返答があった）または（倫理審査対象外）